

## 講演会：阪神水道企業団について ～ 歴史・現状と課題・これから ～

講師：阪神水道企業団副企業長 安藤伸雄氏 技術士（上下水道部門）

### 1. はじめに

安藤氏は、神戸市役所に入庁されて以来、一貫して上水道に携わられており、現在 阪神水道企業団の副企業長として、広域水道の運営を推進してこられている。本講演では、(1)阪神水道企業団の概要、現状と課題、および (2)広域連携の推進状況、などについて紹介いただいた。

### 2. 講演内容

#### (1) 阪神水道企業団の概要紹介

- 阪神水道企業団は、水道用水の供給事業者として、淀川を原水として大道取水場と淀川取水場の 2 箇所取水し、それぞれ猪名川浄水場と尼崎浄水場で浄水処理した後、ポンプ場を経由して、構成市へ水道水を供給している。
- 管路は、淀川原水を浄水場へ導く取・導水管と浄水を構成市へ供給する送配水管で構成され、総延長は、185km である。
- 水利権は、累計で 1,193,875 m<sup>3</sup>/日を保有し、1 日最大供給能力は、1,128,000 m<sup>3</sup>/日としている
- H13 年の尼崎浄水場の稼働により、全量高度浄水処理水となり、以降異臭味の苦情は無くなった。

#### (2) 現状と課題

- 企業団が水供給の事業を行う構成団体(神戸・尼崎・西宮・芦屋・宝塚)の給水人口、年間総配水量の自己水/受水(阪水)/受水(県水)内訳が紹介された。
- 構成団体への配分水量は、1 日最大 1,128,000m<sup>3</sup>/日であるが、実績の 1 日最大給水量は 1,000,000m<sup>3</sup>/日未満で変遷している。S45～S52 右肩上の増加、S53～H14 安定的に高原状で推移し、H14 以降から低減傾向である。近年、実績 1 日最大給水量が実績 1 日平均給水量に接近してきており、負荷率は下がってきている。
- 第 5 回拡張事業が S53～H22 年度に実施されたが、今後は施設改良・更新が主であり、年平均約 60 億円程度の投資が必要。管路および設備の更新割合が多い。長寿命化、アセットマネジメントが課題。

課 題	● 水需要の減少傾向	● 施設の更新需要の増大
	① 構成市水道事業の給水収益の減少 →分賦金の負担軽減 ② 施設効率の悪化 →水源開発からの撤退、 ダウンサイジング、 施設の有効活用	① 財源の確保 →経営改善による経費削減と増収策、 補助金確保、自己資金と起債活用 ② 更新の平準化 →長寿命化、ダウンサイジング、 広域連携によるバックアップ
課 題	● リスクへの対応	● 人材確保
	① 地震 → 液状化、津波、長時間停電 ② 異常気象→土砂災害、浸水、高濁度原水 ③ 都市河川特有の水質問題 →監視体制、給水停止と広報	① 人材育成 → 技術継承、人事交流 ② 共同化 → 水質試験の共同化 ③ 官民連携

#### (3) 広域連携の推進

- ① 阪神地域の最適化研究会

- 阪神地域を一体として捉え、効果的かつ効率的な事業のあり方について研究する

② 兵庫県水道事業のあり方懇話会

- 兵庫県内水道事業者が抱える課題と対応について広く検討する。

③ 改正(予定)水道法

- 国が、広域連携の推進を含む水道基盤強化の基本方針を定める。他

(4) 参考資料および技術情報

紙面の都合で、講演骨子のみ示しているが、<http://www.hansui.org/institution> 阪神水道企業の Web-site で、多くの詳細情報が得られる。

**3. おわりに**

水道事業者は管路施設などの老朽化、耐震性の不足、職員数の減少、水需要減少による料金収入減といった共通する課題に直面している。本講演は、水道用水供給事業の経営主体者の立場から水道インフラの持続性を高める取組の課題や現状を紹介いただけただけなので、阪神地域の水道インフラを理解する良い機会であった。改めて、ご講演を頂きましたことに感謝いたします。